

四月八日はお釈迦さまの誕生日

お詫びを申し上げます。先月号で良寛和尚の辞世の句を良寛に辞世あるかと

人間へば
南無阿弥陀仏と
いふと答へよ

と書きましたが、正しくは散る桜 残る桜も 散る桜でした。

他宗の僧侶良寛さまが辞世に「南無阿弥陀仏と言ふ」と宣言されるほど、良寛さまは阿弥陀さまのお慈悲、南無阿弥陀仏を讃嘆されていることを伝えるつもりでしたが、急いで寺報を作成しているうちにいつの間にか「辞世の句」にしてしまいました。お許しください。

ところで良寛さまは辞世の句に桜を使われています。残った桜もいずれば散っていく、全てのもの無常なることをお伝えになりたかったのでしようね。

桜といえは今年の桜はいつになく早く咲き、皆さんの手元に寺報が届くころには葉桜でしょう。早咲きは桜だけでなく、シヤクナゲや桃、レンギョウが満開になり、ツツジもちらほらと咲き始めています。普段なら五月が見ごろの花々も今月中に満開になるのかもしれない。たくさんの花々が一斉に満開になる、まるで花のお祭りみたいです。

さて、親鸞聖人はお釈迦さまのご誕生をどうとらえられていたのでしょうか。時代劇などで「仇討ちをした後、「これで本懐を遂げられた」という言葉を聞きます。「本懐」とは「元から抱いていた願い」「本来の希望」という意味です。

「花祭り」は、四月八日、お釈迦さまがお生まれになられた日のご誕生をお祝いする日です。灌仏会、龍華会なども呼ばれています。仏教を開かれたお釈迦さまの誕生を祝い、仏教各宗多くの寺院で花祭りはつとめられます。



親鸞聖人は「お釈迦さまの出世本懐」といわれます。この場合の「出世」とは良い地位、身分になるという意味ではなく、この世にお生れになられた、ご誕生になられたことです。つまり、「出世本懐」とは生れた究極の願い・目的ということになります。親鸞聖人はお釈迦さまがこの世にお生まれになられた究極の願いは『仏説無量寿経』にて、法造菩薩が阿弥陀如来と成られることを説くためにあった、阿弥陀如来のお慈悲、ご本願と南無阿弥陀仏のおいわれをお説きになるためであった、とただだかれたのです。自分の力で迷いの世界を脱却し、真実の世界、仏さまのお浄土へ救われていくこと何一つできないこの私を救うためにはたらいてくださる阿弥陀如来のお慈悲に出遇えることとのよろこびを、阿弥陀さまの召喚、そしてお釈迦さまのおすそめ（発遣）があったればこそといただきたいものです。

法語の世界

《原文》

仏法の讃嘆のとき、同行をかたがたと申すは平懐なり。御方々と申してよきよし仰せしことと云々。

『蓮如上人御一代記聞書』二百五十八

《現代語訳》

蓮如上人は、「仏法について語りあうとき、念仏の仲間を《方々》というのは無作法である。《御方々》というのがよい」と仰せになりました。

《用語の意味》

平懐……不作法。

